

2-2・仕訳の方法


仕訳を行う際に考えるべきことは、その取引において何が増減し同時に何が発生したのか、二面的に捕らえることである。

借方と貸方

取引を仕訳する際に、これらを大きく分類すると5つの要素に分けることができる。これら5つはそれぞれのポジションである。

借 方	貸 方	
(資 産)	(負 債)	← 貸借対照表のポジション
	(資 本)	
(費 用)	(収 益)	← 損益計算書のポジション

また資産・負債・資本はそれぞれ増加・減少する場合があります、収益・費用はそれぞれ発生する場合があります。これを分解すると8つの要素に分けることができます。

借方に仕訳されるもの	貸方の仕訳されるもの	
資産の増加	資産の減少	費用・収益については『発生』という概念が用いられるため、資産・負債・資本のように『増減』するという考え方はしないことに注意する。 
負債の減少	負債の増加	
資本の減少	資本の増加	
費用の発生	収益の発生	

勘定科目

借方と貸方に大きく分類された『資産』から『収益』までの5つの要素は、さらに細分化されて具体的に『勘定科目』と呼ばれる項目で処理される。

資産	負債	資本	費用	収益	内 訳	借 方	貸 方
現金	支払手形	資本金	仕入	売上	資産	+	-
預金	買掛金		給料	受取利息	負債	-	+
受取手形	借入金		水道光熱費	受取手数料	資本	-	+
売掛金	預り金		交通費		費用	+	
有価証券	未払金		福利厚生費		収益		+
商品			交際費				
建物			修繕費				
土地							

どの勘定科目が、どの要素に該当し、増減・発生するのは、借方・貸方のいずれで処理すべきかが問題である。

<例> 次の取引の仕訳をせよ。

1. 借入金10,000円を現金で返済した。
2. 交際費3,000円を現金で支払った。
3. 利息8,000円を受取り、普通預金へ預け入れた。
4. 建物100,000円を取得し、現金で支払を行った。
5. 現金100,000円を元入れして営業を開始した。
6. 商品30,000円で仕入れ、代金は現金で支払った。
7. 原価30,000円の商品を40,000円で販売し、代金は現金で受け取った。
8. ボールペン500円を購入し、現金で支払った。
9. 商品50,000円で仕入れ、代金の内20,000円を現金で支払い、残額は掛とした。
10. 原価50,000円の商品を70,000円で販売し、代金の内40,000円は現金で受け取り、残額は掛とした。
11. 従業員の給料4,000円を現金で支払った。

<解答>

1.	(借入金)	10,000	(現金)	10,000	負債の減少・資産の減少
2.	(交際費)	3,000	(現金)	3,000	費用の発生・資産の減少
3.	(普通預金)	8,000	(受取利息)	8,000	資産の増加・収益の発生
4.	(建物)	100,000	(現金)	100,000	資産の増加・資産の減少
5.	(現金)	100,000	(資本金)	100,000	資産の増加・資本の増加
6.	(商品)	30,000	(現金)	30,000	資産の増加・資産の減少
7.	(現金)	40,000	(商品)	30,000	資産の増加・資産の減少
			(商品販売益)	10,000	+ 収益の発生
8.	(消耗品費)	500	(現金)	500	費用の発生・資産の減少
9.	(商品)	50,000	(現金)	20,000	資産の増加・資産の減少
			(買掛金)	30,000	+ 負債の増加
10.	(現金)	40,000	(商品)	50,000	資産の増加・資産の減少
	(売掛金)	30,000	(商品販売益)	20,000	+ 資産の増加・収益の発生
11.	(給料)	4,000	(現金)	4,000	費用の発生・資産の減少

2-3・仕訳帳

ここまで学習してきた仕訳は、実際には『仕訳帳』という帳簿に記録される。仕訳帳の様式は次の通りである。

仕 訳 帳				
日 付	摘 要	元 丁	借 方	貸 方
↑	↑	↑	}	

日付欄 ... 取引が発生した日付を記入する。月が同じなら日付だけを記入し、同じ日であれば「#」とする。

摘要欄 ... 左側に借方の勘定科目を、右側に貸方の勘定科目を記入する。勘定科目には()を付ける。
また、取引内容を簡単に記入する。これを『小書』と呼ぶ。次の取引と区別するため、摘要欄にのみ境界線を付す。

元丁欄 ... 元帳の中にある該当する勘定科目のページを記入する。

金額欄 ... 勘定科目に記入される金額を借方・貸方それぞれ記入する。

< 例 > 次の取引を仕訳帳に仕訳せよ。

6月 10日	商品10,000円を仕入れ、現金で支払った。
15日	友人に対する貸付金の受取利息800円を現金で受け取った。
20日	A銀行の借入金5,000円の返済と、これに対する利息350円の合計5,350円を現金で支払った。

< 解答 >

仕 訳 帳				
日 付	摘 要	元 丁	借 方	貸 方
6 10	(商 品)		10,000	
	(現 金) 商品を仕入れ現金で支払った			10,000
15	(現 金)		800	
	(受 取 利 息) 貸付金の利息を現金で受け取る			800
20	諸 口 (現 金)			5,350
	(借 入 金)		5,000	
	(支 払 利 息) A銀行への借入金の返済		350	

< 解説 >

6月20日の取引は借方の勘定科目が複数であるため回答に示す通り、借方の勘定科目の上に『諸口』と記入する。また、6月20日の次の取引はないため最終行に境界線を引く必要はない。

3.勘定口座への転記

仕訳は取引そのものを記録として残すために行なわれると同時に、帳簿に整理記入するための準備でもある。また、簿記の重要な役割の1つに取引という経済行為の分類・整理を行うという作業がある。仕訳はこの分類という作業にあたり、これから学習する『転記』は整理に該当する作業である。簿記では、取引が発生する都度、「仕訳・転記」という作業が繰り返し行なわれる。

3-1・転記の方法

仕訳に用いた勘定科目は、仕訳のための道具ではなく、実は転記のための受け皿として存在する。例えば、借方に現金として仕訳した場合は、現金という勘定科目の左側である借方に記入される。

<例> 6月18日に現金10,000円を銀行より借り入れた。

(借方) 現金 10,000	(貸方) 借入金 10,000
現金勘定	借入金勘定
→ 10,000	10,000 ←

借方で仕訳した現金勘定は、現金という勘定科目の借方へ記入される。上記の例に示した勘定はアルファベットのT型をしているためT(ティー)字勘定口座(T勘定)と呼ばれ、簿記学習において広く一般的に用いられている。

(借方)	現金勘定	(貸方)
資産の増加 現金の受入		資産の減少 現金による支払

各勘定口座には、左側・右側に転記が可能ないように貸借の区別がつけられている。

3-2・転記上の注意

仕訳を勘定口座に転記する場合は、次のルールがある。これを転記の3要素と呼ぶ。

転記の3要素 ~ 取引の日付・取引の相手勘定科目・取引金額

3-1を例に取り、具体的に勘定科目を示せば次のようになる。

現金勘定	借入金勘定
6/18 借入金 10,000	6/18 現金 10,000
↑ ↑ ↑	
日付 相手科目 金額	

各勘定口座への転記に際して相手勘定科目を記入するのは、勘定口座への転記を見て仕訳が推測できるようにしておくためである。